

著者註

本書に登場する故人についての情報は個人情報保護する目的から細かな点にいくつかの変更を加えました。
本書に登場する存命の人物についての情報は、本人から教えていただいたものをそのまま記しています。

編集部註

〔 ー 〕は訳者による補足です。
邦訳がある場合は、邦訳情報を付しました。本文中に引用された文章は、すべて訳者による独自訳となります。
本文中の書名は、未邦訳のものは初出に原題とその逐語訳を記しました。

はじめに

産まれてきたとき、人はいつか死ぬものと理解していた人なんていない。だれかに教えられてはじめて知ることだ。わたしにそれを教えてくれたのは父だったような気がするけれど定かではない。父も思い出せないらしい。

わたしとは違い、人はいつか死ぬという事実を知らされた瞬間をはっきり覚えている人たちもいる。生と死を分かť厳密な一点を目の前に示された瞬間を記憶している人たちだ。たとえば、鳥が窓ガラスにぶつかった音を覚えている。首の骨を折った鳥がパティオに落ちる直前の衝突音だ。ダラリと力をなくした羽毛だらけの死骸をパティオから引きはがして庭に埋めても、パティオに残る翼の跡が埋葬後何日も消えないのを目にしながら、それがなにを意味するのか理解したのかもしれない。または、飼っていた金魚の死によって、祖父や祖母の死によって、人はいつか死ぬことを知った人もいるだろう。渦巻く便器の中に金魚のヒレが消えて行くのを見守りながら、自分にできる限りの、または必要

な限りの知恵を尽くして、死について頭の中で理解したのかもしれない。

わたしにはその手の記憶がない。死という概念を持っていなかった日々のことを、まったく思い出すことができないのだ。わたしの覚えている限り、死は日常の中にいつでもどこにでもあった。

きっとあの五人の殺された女性たちが最初だったのだと思う。わたしの父（コミックブック・アーティストのエディ・キャンベル）は、わたしが十歳になるまでずっとアラン・ムーア原作の『フロム・ヘル』というグラフィックノベルの作画を担当していた^①。切り裂きジャック事件を題材にしたグラフィックノベルで、あの男の恐ろしい蛮行を粗々しい白黒の画風であからさまに描き出した作品だ。「ジャカリパー（当時のわたしにはジャック・ザ・リッパーとうまく発音できなかった）」はわたしたちの日常に深く入り込んでいて、妹はシルクハットを被って朝食を食べたりしていたし、わたしは、母にダメと言われても父には許してもらえようなんとか工夫しながら、父の画板にピンで留められている殺人現場の様子をつま先立ちになって熱心に眺めていた。そこには、顔と太ももの肉が切り裂かれ、腹から内臓を抜き出されている女性たちの姿があった。その隣に貼られていたのは、ラグビーボールの縫い目みたいに、たるんだ胸と腹が首元から股間にかけて縫われている白黒の検死解剖写真だった。わたしはそれを見てもショックを受けなかったどころか、むしろ強い興味を抱いていた。なにがあったそんな風になったのか知りなかった。もっとたくさん見たかった。もっと鮮明な写真ならいいのにな、カラーだったらもっとよかったのにな、と思っていた。そういう写真を見ても恐ろしいと思わなかったのは、温暖なオーストラリアのブリスベンに暮らすわたしにとって、あの犠牲者たちが暮らしていた霧のロンドンの街角がまったく縁もゆかりもない土地だったのと同じように、あれらの写真に

示されている状況もまた、わたしの生活とはあまりにもかけ離れていたからだろう。今のわたしなら、あれらの写真にはまったく異なるもの（暴力、苦痛、女性蔑視、生命の喪失など）を見いだすことができるけれど、当時のわたしはあれほど凄惨なものを処理できるほどの感情を言語化する能力を持ち合わせていなかった。そんな風にわたしの理解の遙か上を行くものではあったけれど、それでもなお、その上の方で明らかに鳥が窓ガラスに衝突したことをわたしは感じとっていたのだと思う。そのとき以来、わたしの興味は、亡がらをパティオから引きはがし、光にかざし、まじまじと観察するほどのものに育っていったのだと思う。

七歳ですでに、ジャーナリストになった今とほとんど同じようなことをしていた。紙に記すことで理解を深めようとしていたのだ。仕事をする父の隣で、逆さにした段ボール箱をデスクに仕立て上げ、父の真似をしながら、人間が暴力によって死ぬまでの大要をフェルトペンで描いていた。映画やテレビやニュースや父のデスクの上で目にした情報の断片を継ぎ合わせながら、殺される人々の様子を二四枚にわたって描いた。眠っている間に鉈で切り刻まれた人、ヒッチハイク中に森で刺された人、魔女に鍋で煮られた人、生きたまま埋められた人、吊るされたまま鳥の餌になった人。「首をはねられて皮膚が腐るとこんな風になる」というキャプション付きの頭蓋骨の絵もあった。ある日、父がグラフィックノベルの一場面を描くため、肉屋で買ってきた腎臓を居間でハンカチの上に置き模写をはじめたことがあった。暑さのせいで腎臓がとんとん腐ってゆく中、わたしも父の隣で同じことをした。わたしの模写の方がより現実的で、集まってきた蠅の集団もありのまま描き込んだ。父はわたしの描いた二四枚の絵をすべてバインダーに入れ、客が来るたびに誇らしげに見せびらかしては客たちを

ゾッとさせていた。

死は家の外にもあった。わたしたちの家は交通の激しい車道沿いにあったので、猫たちにとってはけっして長生きできる土地ではなく、たいていの猫は道路脇の溝で硬直した姿で命を終える運命にあった。わたしたちはよく、明け方にそんな猫の死骸の尻尾をフライパンみたいに持って引き上げては埋葬していた。猫にしてみればもう知ったことではないだろうけれど、わたしたちにとっては、死んだ猫に捧げる静かでささやかな儀式だった。わたしの通っていた学校では、夏場に通学路で鳥（たいていはカササギ）が死ぬと、その死骸が腐り終えるまで通学ルートが変更された。涼しい土地だったらきつと気にならないかもしれないけれど、灼熱のオーストラリアでは死骸の腐敗が激しく、たった一羽の鳥の死骸でもその道を通れなくなるほどの事態に発展するに十分だった。だから校長先生から死臭が風に飛ばされてすっかりなくなるまではその通学路は通らないように、というお達しが出るのだ。わたしは死臭を放つ鳥の顔をじっくり見られるかもしれないと期待しながら、その禁じられた通学路をいつもあえて選んで歩いていった。

死を描いた場面はわたしにとって馴染み深いものだった。父がたまたまデッサンに使ったコピー紙の裏面を宿題に使うことも少なくなかった。わたしにしてみれば、まだ裏が使える紙を再利用するため積まれた束の一番上から何気なく取っただけだ。呆気にとられて言葉を失いながら、その不快な黒い血だまりのデッサンを見入る先生に、わたしは「これは娼婦の死体よ」と説明した。「もちろんただの絵だけど」と。死というものは普通に起こること、日常的にたくさん起こるものだとわたしは思っていた。しかし、死は良くないこと、人目にさらしてはいけないことだと言われ、まるでわたしが道徳上の罪を犯したかのように叱られてしまった。先生が電話で両親に使った言葉によれば「不適切」なのだそうだ。

わたしの学校はカトリック系だった。学校の司祭のパウワー神父（もともと喋るアイルランド人で、当時のわたしにとってはあり得ないほど老けて見えただけで、ときには、収集車が到着する前にできるだけの粗大ゴミをコンテナに詰め込もうと、聖職者用の法衣を翻しながら軽々とゴミ置き場に飛び乗ったりすることもある人物）は、週に一度、わたしたちを教会の最前列に座らせ、はっきりとした声で講話をしていた。自分の椅子を祭壇のそばまで運んで座り、頭上にあるスタンドグラスに描かれたシーンを見せながら、自らの死に場所まで十字架を運ぶキリストの話聞かせたりするのだ。そんなある日、パウワー神父は祭壇の左横にある赤い電球を指さして、このランプが灯っているときは神がこの教会に降臨しているのだ、神がこの赤ランプを灯しているのだ、と言った。わたしはそれ（裝飾された真鍮のケージの中で光る赤い電球）を見上げながら、「神がそれを光らせているのに、どうして延長コードが壁をつたって赤い電球を吊るす鎖まで繋がっているんですか？」と質問した。一瞬の間を置いてから咳払いをひとつした司祭は、厳かな声で「本日の質問はここまで」とだけ言う別話題に移った。わたしはその日から未来永劫、問題児として扱われ、両親（片方はそれを誇りに思い、もう片方はそれを恥じた）との面談が必ず必要な児童とされ、ミサでパンやワインを配る役目は一度も回って来なくなった。

神父が電気を使って魔法的・霊的なものを演出しようとしたことに嫌悪感を抱いたわたしは、それ以来ずっと組織化された宗教に猜疑心を持ちつつづけている。「どんな病気にも効く万能薬」みたいな、耳あたりの良い嘘とかごまかしにしか思えないからだ。天国という発想は、いい子にしていればパン

ケーキ食べ放題のホリデーに連れて行ってあげよう、という甘言のようで、あまりにも安直な発想にしか思えなかった。その後もカトリック系の学校に何年も通わなければならなかったけれど、問題の解決策として宗教的なものが提示されるたびに、わたしの頭の中であの赤ランプが警告灯のように光るようになった。

身近な人の死にわたしが初めて触れたのは、同級生のハリエツトが入り江の洪水から愛犬を救おうとして溺れ死んだときのことだ。わたしも彼女も十二歳だった。彼女の葬式の内容は、弔辞の内容もどの先生が参列したのかも、その中のだれかが泣いたのか、それとも泣かなかったのかも、まったく覚えていない。無事に救出された黒いラブラドルのベルちゃんも葬儀の場にいたのか、それとも、家にいたのかもまったく記憶にない。覚えているのは、教会の席に座って、蓋をされた白い棺ひつぎを見つめながら、あれの中を見たいと無性に思っていたことだ。マジシャンも常套手段にしているように、閉ざされた箱を人々の目前に置けば、そこにいる人たちは中を見たいとソワソワしてくるものだ。わたしはひたすらその箱を見つめるばかりだった。自分からほんの数フィートしか離れていないところに友だちが入っているはずなのに、その姿は隠されている。なんとも苛立たしかったし、確かに存在していた彼女が、具体的な証拠がまったく示されないまま、もう存在しなくなったのだと聞かされても、それを受け入れることはできなかった。だから彼女の姿を見たかったのだ。ひとりの友だちを失ったことに加えて、それ以上のなにかが欠けているように感じて仕方なかった。なにかが意図的に隠されている。事実をすべて見たい、知りたいと思いつつも、そうすることがかなわなかったせいで、純粹に悲しむこともできなかった。今の彼女は前と変わらない姿なのか、それとも変わり果てて

しまったのだろうか？ 彼女もあのカササギのような臭いを放っているのだろうか？

わたしは死という概念について恐いとは思っていなかったし、むしろ魅了されていた。あの猫たちが土に埋められた後でどうなるのか知りたかった。あの鳥たちが樹から落ちた理由も、どうして悪臭を放つのかも知りたかった。骸骨（人間、動物、恐竜など）がたくさん描かれている本は何冊も持っていたし、自分の骸骨を把握しようとして皮膚を指で突いたりもしていた。わたしの両親は、わたしが質問をすれば遠回しなごまかしをせず、率直に答えてくれる人たちだ。悲しい死をとげた猫たちの姿だとして、ぐちゃぐちゃなやつも、そうでないやつも、きちんと見せてくれたし、その絵を描けば賞賛もしてくれた。ところが学校では（鳥でも、絵でも、友だちであってさえも）その死から目を逸らしなさいと言われた。授業でも教会でも、死についてわたしとはまったく違う考え方を教えられた。死は一時的なものであると言うのだ。わたしにとっては、切り裂きジャックの犠牲者たちの写真の方がずっと真実に思えた。あの犠牲者たちが生き返ったという話は聞いたこともないのに、学校によればキリストは復活し、しかも第二の復活までしたと言う。わたしが自力でようやく色々な事例を継ぎ合わせて出来上がりはじめた概念を捨てなさい、学校があたえる既成概念の枠組みに挿げ替えなさいと言われていくような気がした。わたしにとっては普通のことではしかない死への反応や議論は体よく避けられ、死はタブーであり恐れるべきものであると教えられた。

わたしたちの日常は死に満ちている。ニュースにも、小説にも、コンピュータゲームにもそれはある。スーパーヒーロー・コミックスにも、翌月までもったいぶってハラハラさせる形かもしれないが、とにかくそれはある。実際にあった犯罪を取り上げるポッドキャストにもあるし、インターネット上

にも溢れている。だれもが知る童謡にも、人気の博物館にも、殺された美女が登場する映画にもそれはある。ただし、死体そのものの肖像は巧みに編集されていて、たとえば斬首されたジャーナリストの首にはモザイクがかけられるし、古い童謡の歌詞にしても、今どきの子どもの情操教育に不適切であるとされてその部分が削られている。自宅アパートで焼死した人の話や、海の上空で消息を絶った飛行機の話や、トラックの運転手が通行人を次々となぎ倒した話はしょっちゅう耳にするけれど、そのありのままの状況を理解するのは難しい。現実には想像が入り混じるため、あたかも背景の雑音のように、うやむやになってしまうのだ。死はあらゆるところにあるのに、そういうペールに包まれているか、またはフィクションばかりだ。コンピュータゲームみたいに死体の存在がスッと消えてなくなってしまう。

だけど現実では死んだ人の身体は必ずどこかに運ばれている。あの日、教会に座って友だちの入った白い棺を見つめながら、わたしは、彼女の死体を入り江から引き揚げただれかがいること、彼女の死体から水を拭きとっただれかがいること、彼女の死体を運搬しただれかがいることを知っていた。わたしたちではないだれかが彼女の死体を処理したはずだということは明白だった。

世界では一時間に平均六三二四人の人が死んでいる……一日に換算すれば一五万一七七六人、一年だと五五四〇万人だ。オーストラリアの人口を超える人が半年ごとにこの世を去っている。西洋諸国のたいていの一般人にとっては、遺体処理とは電話をかけることを意味する。電話さえかければ、だれかがストレッチャーをたずさえてやって来て、遺体安置室まで死体を運んでくれる。隣人から悪臭の苦情が出るまで気づかれることなく腐敗した死体(あの石膏で復元されたポンペイの犠牲者みたいにマッ

トレスに痕を焼きつけた死体)が横たわっていた床を清掃する必要があれば、それも電話一本でだれかが代わりにやってくれる。身寄りのない死亡者の孤独な生活を形作っていた様々な品物(靴、ポストに詰め込まれた月刊購読誌、読まれることのなかった本の山、冷蔵庫の中で所有者よりも長く生き延びた食品、オークションにかけられるべき品物、ゴミ捨て場まで運ばれるべき品物など)をアパートから撤去する必要があるれば、やはりだれかに電話をかけ、お金を支払って、そのすべてをやってもらう。

葬儀場ではエンバーマー(死体防腐処理者)が、死体から死人の印象をできるだけ取り除き、まるで生きて眠っているように見えるよう処理をする。そんな風に、普通の人には直視できない作業、もしくは直視できないと信じ込んでいる作業を仕事にしている人たちがいる。わたしたちの人生の終焉が彼らの日常だ。

だれかが必ずやらなければならないこれらの仕事をするごく普通の人たちのことを、深く知っている人はあまりいない。死そのものが秘められるべきものとされているのと同様に、わたしたちの社会はそういう仕事をする人々とも距離を置いている。殺人犯のニュースはよく聞かれど、カーペットにこびりついた血や壁に飛んだ血しぶきをゴシゴシ洗い落とすため殺人現場に呼ばれる人たちの話はほとんど耳にしない。高速道路の脇にこんもりと積まれたドブ溜りの堆積物の横を通過することはあっても、交通事故で飛び散った死体の一部を探してそのドブを浚った人の話は耳にしたことがない。好きだった有名人の自殺を知ってツイッター「現X」で哀悼の意を表すことはあっても、その有名人の首吊り死体をドアノブから降ろした人の話は耳にしない。彼らは有名でもなければ功績を称えられることもない、人知れず仕事をする人々だ。

死について、そして、死体にまつわる作業を仕事にしている人々について、わたしは何年も前から考えるようになり、その思考は蜘蛛の巣のように広がりがつづけていた。わたしには想像でしか触れることのできない事実には、彼らは毎日のように触れている。通気口からモンスターの足音が響いてくるだけの方が、モンスターの姿を実際に見るよりもずっと恐ろしいものだ。それなのに、死を理解するのに必要な具体的なものは一般人の目の前に何ひとつ提供されない。写真ではなく、映画でもなく、鳥でもなく、猫でもなく、普通の人間の死がどういう姿をしているのか、わたしはそのことを知りたかった。

もちろんわたしとは違って、そういう仕事にたずさわる人を個人的に知っている人もいるだろう。ツタだらけの古い墓地にあなたを案内し、この墓に眠っているのは燃えやすい素材の服を着たまま火の近くに立ったばかりに生きたまま焼かれるはめになった女性だと教えてくれる人だとか、あなたを医学系の資料館に招き入れ、大昔に死んで真っ白に漂白された人間がガラス瓶越しにこちらを見つめ返す標本をひとつだけ選んで観察させてくれる人だとか、そういう人々を友だちに持っている人もいるだろう。どうしてそんな仕事にわたしが興味を持つのか理解できない人もいるだろうし、逆に、興味を持って当たり前だと思ふ人（映画『アニー・ホール』でアニーにアーネスト・ベッカーの本『死の拒絶』を無理やり勧めたアルヴィー・シンガーのような人）もいるだろう。死に興味を抱くことは単に不健全なことではないとわたしは信じている。死にはどんなものより強く心を引きつける力がある。ベッカーは、死とは世界を終わらせるものであると同時に、世界を突き動かすものでもあると『死の拒絶』に書いている⁽³⁾。

人はなにかの答えが欲しいとき、教会とか医者とか山奥とか海とかに出向くのが一般的だ。でもわたしはジャーナリストだ。人々に質問することを生業なりわいにしている者のひとりとして、答えは人々から見いだせるものと信じている（または、そうであってほしいと願っている）。本書でわたしがやっているのは、死に接する仕事を日常としている人々たちを見つけ、彼らの仕事の内容や方法を（その業界がどういうものなのかということだけでなく、死にたいするわたしたちの社会の接し方が彼らの仕事にどのように影響をあたえているのか、そして彼らの仕事の土台をとるよう形成させているのかも含めて）教えてもらうことだ。西洋では特に、死者に接する作業は、あつてはならないもの、もしくは、すべきではないこと、という発想がその前提にある。そんな中で、一般人が自分では手に負えないからという理由で外注したその重荷を、彼らは仕事としてどうこなしているのだろう。彼らだって人間だ。というか「一般人」も「彼ら」もない。どちらも人間でしかないのだから。

この社会の死への接し方は、人として大切な知識を得る妨げになっているのではないだろうか。わたしが本当に知りたかったのはそこだ。死は拒絶すべきものと決めつけられている社会に生きること、つまり純真と無知の境界線上に生きること、まったく根拠のない恐怖心が育まれているのではないだろうか。死がどんなもののかをきちんと知ること、死体がどんなもののかをしつかりと見ることは、死にたいする恐怖心の解毒剤になりえるのではないか？ だからわたしは、ロマンティックでもなく、文学的でもなく、不適切とされる箇所を体よく削除することもなく、曇りのない目で死を見つめたいと思っている。だれにでもいつか必ず訪れる死について、素のままの、ありのままのリアリティをわたしは追い求めることにした。オペラートに包んだ表現を使うつもりもないし、心優しい人

たちと午後のお茶とケーキを囲んで故人を偲ぶような本にするつもりもない。わたしがやりたいのは根本を深く掘り下げることです。自分自身を成長させることだ。「あなたが死を恐れているって自信を持って言えるのはなぜ？」とはドン・デリーロの『ホワイト・ノイズ』に出てくるセリフだ。⁽⁴⁾「死ってものすごく漠然としていて、それがどんなものなのか、どんな感覚なのか、どんな見た目なのか知っている人なんていない。もしかしたらあなたの個人的な問題が、大きな普遍的問題となって表に出てきているだけなのかもしれない」。わたしは死の概念を、自分の手で抱えられるもの、自分で取り扱えるものに縮小させたいと思った。そう、人間のサイズに縮めたいと思ったのだ。

色々な人たちから話を聞けば聞くほど、わたしの頭の中には次々と別の質問が生まれてきた。「あなたを選ぶ必要のなかったこの場所に身を置くことで、あなたはなにを見いだせると考えていますか？」「ここまで自分を犠牲にしてやる理由は？」

ジャーナリストはどんな現場に入り込んだとしてもその場と一線を画した存在としてまったく影響を受けることなくレポートできる、という一般認識は間違っている。わたしも以前までは目の前の状況に影響を受けることなど絶対がないという自信があった。でもそれは間違っていた。なにかを見落としていってしまうことまではわかっていたけれど、これほど深い心のダメージを受けることになることはまったく思っていなかった。それと、この社会の死への接し方が日常生活にとれほど大きな影響をあたえているのかにも気づいていなかった(たとえば、大切な人が亡くなったときに、死について理解することの妨げになっているだけでなく、死を哀しむ妨げにさえもなっていること)。わたしはようやく本物の死体を目にしたけれど、そうすることには人生を変えるほどの力があった。それも言葉では表現できないほど

とすごい力だ。暗闇を見つめたことで、そこにある別のものを見つげることができた。ちょうどダイブズウォッチとか、子ども部屋の天井に貼られた蛍光シールの星みたいに、輝きを見るためには明かりを消さなければならぬときだ。あるのだ。